

■ 関西・大阪が目指すべき行動指針の提唱

I 日本人の心を伝える

日本と日本人を国際社会で本当に理解してもらうためには、日本人の心を伝え理解してもらう必要がある。その役割は、特に歴史と伝統のある関西が果さなければならない。

経済のグローバル化によって加速された貧富の格差拡大により世界で「分断」が広がる中、日本文化の根底たる「調和の精神」はそれを克服することができる重要な精神文化である。自然との共生、異文化や異なる宗教の受容、他者への理解と寛容などは日本人独自の考え方である。それは、物事を善と悪、物体と精神といった二元論ではなく、多様性の価値を理解する心であり、文化を尊重する姿勢にもつながる。

大阪はかつて、大陸から仏教が伝わった折に四天王寺が建立され、中世には本願寺が拠点を置くなどその都市の原点は宗教都市にある。商人は商いの姿勢を寺院に問い、寺院は利益の追求を勧め社会貢献の重要性を説いたという。大阪の商人には、商いの利益を社会貢献や文化に投資する気質が養われてきたといわれるのも、この街の成り立ちが深く影響している。さらに、京都や奈良、高野山などに目を向ければ、歴史に裏打ちされた日本を実地に体験できる資産にも豊富に恵まれている。そんな関西だからこそ、日本と日本人の心への理解を深め伝えていく試みが効果的に推進できる。

1970年の大阪万博の理念「調和的発展の精神」は人類すべてにおいてあまねく発展を願うものであり、再び関西で開催される2025万博にも通じる精神である。万博の理念にも通ずる日本人の心を、今回の万博の機会を捉えて関西から発信し伝えていくのが我々の責務といえよう。

II 文化の担い手を育てる

長きにわたり都が置かれていた京都は、公家の街、政治、宗教の街として文学、和歌、茶道、華道、絵画、織物など伝統工芸から建築様式に至る、今日の日本文化を構成するあらゆる分野の発展に寄与してきた。今もその土地柄に揺るぎはなく、多く残る種々の歴史遺産は国内外から人々を引き付けて止まない。

では、大阪はどうか。「文楽」を生み出し、井原西鶴、近松門左衛門など著名な芸術家を輩出してきた土地柄である。商人の街のイメージが強いが古代から宗教都市の顔も持ち、そんな街の気風が、商人をして稼いだ利益を文化や社会貢献に投資する風土を生んできたといわれる。

多くのアーティストが関西から東京へ活動拠点を移す中、アーティストが街づくりに参画する仕組みを構築してアーティストの作品が市民の目に触れる機会を創出する。それによりアーティストは社会と接点を持ちアートを活かした街づくりへとつながる。そのためにも、アーティストの育成・支援は急務である。

また、アーティストが本物のアート作品を介して次の時代を担う子供たちと交流し、彼らの芸術感覚を育み自ら発想できるアート思考の人材育成を図ることも、アーティストと社会をつなぐ接点といえる。アートの創作基盤の構築、アーティストとの接触機会の拡大が求められている。

世界で文化による活性化に成功した都市に共通していえることは、市民が自らの街に誇りを持ち、よその、若者を呼び込み、共に活動している点にある。重要なことは、市民自らが創造活動に参加し、地域に根付いた文化の土壌を耕し、肥やし、苗を植えて新たな芽を吹かせることである。それにより、観光客など交流人口も増え、人口減少や高齢化によって地力の衰えた地域に就労機会が生まれ、人が住みたくなる魅力が生まれ、地域の活性化が促される。

Ⅲ 文化による経済・社会の活性化

(1) 文化と経済の融合

文化と経済は別々のものではなく、まして相反するものでもない。感性の涵養が経済を刺激する。イノベーションを生むためには文化活動の活性化が必須であり、ITやAIが経済活動に大きくかかわってくる時代に在って、イノベーションを誘発するには感性のひらめき、発想力、デザイン力がますます重要になっている。そのためには幼少期から一流の芸術や文化になじむとともに自らも取り組むことが望まれる。

そして今、家庭、学校、会社、社会の各レベルにおける文化化が経済発展に大きくかかわってくる時代になったといえる。経済の文化化、文化の経済化が必要なのである。前者で言えば、例えば工業製品で、性能や使い勝手がいくら優れていても、見た目の美しさ、デザイン性が備わっていなければ市場競争で勝ち残ることができない。このデザイン性こそは文化であり、日本人が力を発揮すべき点である。後者では、食文化、歴史遺産等で人が集まり経済が活性化する。観光による経済の活性化が最たる例である。

(2) IT、AI とネットワーク化

コロナ禍ではバーチャルとリアルとの融合が顕在化した。オンライン形式と実際の参加を併用した、いわゆるハイブリッド方式によるイベント開催の常態化などは顕著な例である。今後、各方面でITやAIを活用した動きが普遍化し、新たな経済価値を生み出すことは容易に想像される。同時に文化活動でも、ITやAIを活用するアーティストが活躍する場が想像される。

また、今後、文化施設間の連携によるネットワーク化の推進は重要になってくる。中之島を見ればいくつもの美術館、博物館等が集積しているが、点として存在するだけでなく連携しネットワーク化していくことで、大阪の魅力を倍増させ、もっと創造性に富んだ街にすることが可能になり、街に新たな価値をもたらす。関西・大阪の伝統文化と新たな創造性を持つ街は、内外から新たな需要を創出し活性化をもたらしていくことになる。

Ⅳ 新たな広域連携への取組み

関西・大阪は、他の地域の発展に貢献することで結果的に関西・大阪に繁栄をもたらしてきた、という歴史的事実がある。それは瀬戸内海の海流と日本海の風の道による舟運がもたらした賜物であり、瀬戸内(山陽・四国)・山陰地方から北陸・東北・北海道に至る地域の発展に貢献してこそ、結果として関西・大阪も潤ったのである。この動きは日本海側に一大経済圏を築き、この地域は大いに繁栄していた。

現在、この舟運を担った北前船の多数の寄港地に残る史跡が文化庁の指定する日本遺産に認定されている。その数は全国 48 か所を数え、関西地区には 10 か所が存在する。それら史跡を擁する 10 の自治体が連携して観光施策を立案、実践し人々の流入を促す。文化資産の活用により経済の活性化をもたらすという視点は重要である。

東京一極集中による地方の人口減少が進む中で、関西・大阪が瀬戸内・日本海文化圏と連携することにより、歴史的ポテンシャルをより一層発揮し、交流人口の増加とそれに伴う経済活動の活性化に貢献することになる。それは、首都圏・東京の経済圏に対する差別化を図り、関西・大阪の新たな文化・経済の発展へとつなげていくことになるのである。